

さざなみ

国語教室

さざなみ国語教室
 第514号 2025年 1月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

国語科授業と隠れたカリキュラムで育む 言葉の力

上出 愛

「手紙」を題材とした文学作品は多くあります。日本での手紙の起源は古代に遡りますが、特に平安時代にはひらがなが誕生し、女性も文字を書くようになると、手紙(文や消息)が盛んになりました。その後、江戸時代には「手紙」という言葉が使われるようになりました。そして、今日に至るまで、手紙は人と人とを繋ぐ大切なコミュニケーション・ツールとして、扱われてきました。

ただ、現在のネット社会では、瞬時かつ簡単に言葉のやりとりができます。それでも、今なお、なぜ手紙は多くの人の心を打つか、手紙を題材とした物語に心が揺さぶられるのか、そこには、国語教育で大切してきたことがあるように思います。

私自身も、手紙に書かれたメッセージを何度も読み返し、前進する糧にしたり、今は亡き人を偲んだりして、涙することもあります。特に、子どもからもらった手紙は、とても嬉しく、日々の原動力になります。一生懸命、相手を書いて書かれた手紙は、読むだけで、心に響きます。そのような言葉に関わる感受性を、子どもたちにも育みたいと願っています。

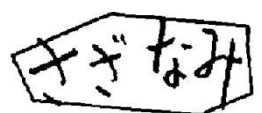
昨年度も、吉永先生に本校の内授業研究会にお越し頂き、一年生の授業(「てがみでしらせよう」)について、「ご指導・ご助言を賜りました。この単元では、子どもたちが相手を決めて、自分の言葉で手紙を書き、相手に届ける活動をゴールにしました。すでに

これまでの国語の学習で、相手意識を明確に持って書く活動や、文字や文を正しく書けるように読み返す学習を行ってきました。この学習で、子どもたちは手紙を書く活動をを通して、相手に自分の気持ちが届くように、既習事項や経験を踏まえ、取り組みました。型を参考にして、読み手に分かりやすいメッセージを書こうと、内容を練ってから、下書きをして、清書しました。一年生の子どもなりに自己調整しながら、精一杯、相手への丁寧な心遣いを意識して取り組むことができました。手紙を書くことを通して、相手の良さを言葉で表現することもできました。

私も、子どもたちから手紙をもらうことがあります。私もその都度、できるだけ丁寧に返事を書くようにしています。返事をすることで双方のコミュニケーションが成り立ち、手紙を送ること・もらうことの嬉しさを実感できます。

国語の授業だからこその学びを大切しながら、限られた学習場面だけでなく、日々の暮らしの中で、子どもたちの生きた言葉の力や想像力を培っていきたく願っています。言葉に関わるたくさん経験の積み重ねができるよう、学校として、校長としてできることを模索してまいります。

(寝屋川市立木屋小学校 校長)



▼新年を迎える時いつもこの言葉を思い出します。「新年」といっしゅうの何もお初もがマツサラのお初というふうに見えて、わくわくしました。目が覚めて出会う服、机、窓の外の色、歯みがきも、今年はじめのお初の仕事だから、水道の蛇口にも歯ブラシにもコップにも、ドキドキしながら「あけましておめでとう」と言いました。これは、既刊の「さざなみ国語教室」の巻頭言として詩人藤直子のお言葉です。「いつもと違う」目で、まわりを見ると、ほんとうに世界の景色が変わります▼学校は多様化の時代を迎えています。学校教育も指導方法の工夫や改善が求められています。1人1台の端末をはじめ「環境の整備が整い、「令和の日本型学校教育」の構築に向けた研究実践が進められています。個別最適な学び(個に応じた指導)・指導の個別化と学習の個性化を学習者の視点から整理した概念)「令和の日本型学校教育」の構築に向けた研究や実践が広がりは深まっています。が、大事なことは、本気で一人一人の子どもにより添って指導に取り組む覚悟があるのかどうかを問われているのです。学習したいのにそのようにはいられないのか分らないという子がいます。その事実に向かいあうことが最初の歩です▼「いつもいつまでも」「お初で」ということもまた最初の歩を踏み出すことから始まるのです。

(吉永幸司)

『みきのたからもの座談会』
井上 澁斗

今年から、二年生の国語科の教材に『みきのたからもの』という新しい物語文が加わった。

このお話は、未知の宇宙人「ナニヌネノン」と、「みき」という女の子との交流が描かれ、「みき」が夢をもつきっかけとなった出会いの物語である。この物語のおもしろいところは、未知の宇宙人「ナニヌネノン」が一体どんな姿をしているのかなど、描写をもとに、自由に物語を想像して楽しめるところである。

この良さを生かし、読書の本質的な楽しさを実感できるように、また、友だちとの意見共有の中で、さらに想像を膨らませることができるように、子どもたちの初発の感想から作り上げた話題についてとにかく話し合う『みきのたからもの座談会』という活動を言語活動に設定した。

この活動をするにあたって、3つのルールを設定した。

- ①必ず、座って交流すること。
※床がやわらかいPC室で学習した。
- ②話題について、できるだけたくさん友だちと話し合う。
- ③友だちの考えをひていしな「い。」どうしてそう思ったん?」「なぜ?」を大切にす。

座談会は、全四回行いました。その時の様子を一部紹介します。
〈一回目の座談会〉

話題：「みきはナニヌネノンを見ているのか?」
A：「みきははじめこわかったと思う」
B：「どうして、そう思ったの?」

A：「(教科書を広げながら)だってな、ここにな、『見なれない』って書いてあるから。初めて見るものやったから」
B：「ほんとか。わたしはな〜」

〈三回目の座談会〉
話題：「みきのたからものって?」
C：「ぼくはな、みきのたからものは、ナニヌネノンからもらった『青い石』やと思う。」
D：「わたしも同じ考え。だって、そのお返しに自分のリボンもわたいているし〜」

C：「みきのたからものは『青い石』やけどさ、ナニヌネノンのたからものって〜」
CD：「(みきからもらった)リボン!!!」

座談会の回数を増すにつれ、どの子どもも、叙述を基に自分たちで想像したことを次第に話し合っていた。ただ伝え合うだけでなく、互いの考えから新しい考えを発見したり、深めたりすることもできた。『座談会』という言語活動の可能性を強く感じた実践だった。

(豊郷町立日栄小学校)

お気に入りの民話を紹介しよう
山田 定子

「三年とうげ」(光村図書三年下)から他の民話や昔話を読み広げ、面白いと思うところを紹介する言語活動を設定した。

単元の導入で「自分のお気に入りの民話を読んで、そのおもしろさを友だちに紹介する」という単元のゴールを示し、目的を持って学習を進められるように計画した。学習の始めから、他の国の民話や昔話を置いておき、読書タイムや時間に余裕のある時にはいつでも読めるようにしておいた。ほとんどの子が、準備した三十五冊の本を読み終えることができた。自分で選んだ民話の面白いところを見つけて紹介する文章を書くために「三年とうげ」の面白さについて考え、自分の考えや思いを交流した。「友だちと同じところでおもしろいと思ったけれど、書き方がくふうされていた。友だちは、くわしく書いていた。」等、各々が考えを深めることができた。

このことを参考にして、自分の選んだ民話の面白いところを見つけ、そう思ったわけもメモして文章を書くようにした。どの子ども本をよく読んでいたので、すんなりと書き進めることができた。また、挿絵も自分で工夫して描いたので、とても楽しい紹介文ができた。この紹介文を交流する時、いろいろな友だちに自分のお話を読んでほしいという思いが強かったので、隣の友だち、グループの友

だち、同じ本を読んだ友だち、と紹介文を読み合い友だちの紹介文のよい所を見つけ、コメントを書くようにした。

◎あらすじがきちんと書いていて、すごいなと思った。それに、「わくわく」や「どきどき」という言葉が入っていたので、ますます読んでみたくなりました。
◎あらすじがとても上手に書いていました。おもしろいところも分かります。書きやすかったです。いい言葉がたくさん入っていてよかったです。

◎絵がとても上手なので、お話がそうぞうしやすかったです。と、友だちのよいところがたくさん見つけられ、コメントを読んだ子からも、自分のよさを認めてもらえてとてもうれしかったようである。

最後に、全員の文章を紹介すると、赤鉛筆で友だちのよいところを印を付けている子がいた。「いいことだね」と声を掛けると、真似して多くの子がしっかりと読むようになった。

保護者の方からも「お話の紹介がすっかり書いていてすごいと思いました。また、友だちの意見や発表を聞いて新しい言葉を覚えたり参考にしたりしているところも素敵だなと思います。絵もたくさん描かれていておもしろいです。」
等、コメントを書いていただいた。それを読んだ子ども達は、本当に嬉しそうに顔をしていた。

この学習を機に読書の楽しさを感ぜられるだろうと思っている。

(野洲市立北野小学校)

自由進度学習への道
畑中 翔太

6年生にとつて最後の小学校生活が始まった。学期初め子ども達に「丁寧」に生活することの大切さについて話した。丁寧な学校生活、学習へ向かう姿、友だちへの関わり方、という視点で自分を振り返り、胸を張って卒業できるような日々を過ごしてほしいと思う。早速、「おはようございます。」「ありがとうございました。」と元気に声を出す子ども達を見て素直で努力のできる子ども達に改めて感心した。こうした姿勢を大切にしながら、学習にも生かしていきたい。自由進度学習とよく耳にするようになり、2学期には漢字学習で自由進度学習を取り入れた。漢字学習を選んだ理由は二つだ。一つ目は、1学期の様子を見ていて漢字に苦手意識をもつ児童が多いと感じたこと。二つ目は、漢字学習が自由進度学習に向いていると知ったからだ。主に以下5つに取り組んだ。

- ① 読みを大切にすること（ドリルを見ながら音訓読み、意味、熟語を声に出して3回読む。）
- ② なぞり書きで形に慣れること（書き順を確かめながら指でなぞり、慣れたら空書きをする。）
- ③ ドリルに書き練習（線をはみ出さないようにする。「はね」や「はらい」を意識して丁寧に書く。）
- ④ チェックすること（覚えられたか、自分でチェック。ペアでチェック。複数人でチェック。）
- ⑤ 活用していくこと（覚えた漢字を使って文をつくる。まだ知らない熟語を調べる。）

これらを、練習することから始めた。さらに、子ども自身でいつまでにどの漢字まで進めるのか期限を考えドリルに記入させた。以降、自分に合った進度でドリルを進め、教師は、それぞれの進み具合を把握したり、早くドリルを終わらせた子への追加課題を用意したりした。

2学期末の50問テストでは、「初めて50点台の点数が取れた。」と喜ぶ子や「あと二文字あったら満点だったのに。」と悔しがらざれた。自由進度学習は、それぞれの意欲や学び方が異なるが、そこで高得点を得られなかった子がいたことが反省するところだ。新しい学習方法になるということは、その取り組みの良さや効果も子どもが実感しなければ続かない。このことから3学期はさらにスマールステップを意識した自由進度学習に取り組んでいく。

- ⑥ カレンダーを活用してテスト日の提示（教室にテストをする日を示し、期限をより意識させる。）
- ⑦ 最低限進めなければならない計算（期限に遅れないように、一日の進む量を確認する。）
- ⑧ 読みテストの追加（書きテストよりも点が取りやすく、点数を取ることが出来る。）
- ⑨ 加点制度（加点制度で100点という上限を無くし意欲につなげる。）

楽しく詩を学ぼう
川部 長人

冬休みが明け、3学期最初の授業で詩の学習をしました。「ねこのこ」（光村図書二年生）の教材を行いました。授業の初め、題名を隠したまま教材文の視写を行いました。一文、一文上段を書き、下段の言葉を予想しながら進めていきました。一文目の「あくび」と板書し、「みんなあくびはどんな感じですか？」と聞いてみると、「ふあー」や「ふあふあ」など実際にあくびをしながら答えていきました。あくびに続く言葉は「ゆうゆう」と板書すると「どうゆうこと？」や「これ何の詩？」という疑問がたくさん出てきました。次に二文目の「あまえて」に続く言葉を考え、「あまえて」「ごろごろ」と板書すると、「小さな子の感じがする」という発言がありました。三文目の「たまご」の続きを考えると「ぱりぱり」など多くの子が四字の言葉を考えるようになり「たまご」「なぜ、みんな四文字の言葉にしたの？」と聞いてみると、「四文字やトリズムがいいやん」と「今までの二つが四文字やったから次も四文字の言葉が入ると思ったから」というような意見が出てきました。「たまご」の続きは「ごろごろ」と板書すると、「やっぱり四文字や」という発言があり、子どもたちは自然と詩の表現の工夫に気づいていく姿がありました。そのような形で、最後の文まで考えていきました。最後の文は「ミルクで にゃん」という文で、子どもたちから「ねこの詩や」とい

う発言がありました。その発言を受けて、「この詩の題名はなんだろう？」と発問してみると「ねこのこ」と「ねこの一日」など様々な題名が出てきました。ある子が「あまえて、ごろごろとか、子どもねこみたい」という発言もあり、「この詩は『ねこのこ』という題名です」と紹介しました。すると子どもたちから「いぬのこ」の詩も作ってみたい」という意見が出たので、クラスみんなで「いぬのこ」の詩を考えてみました。「ねこのこ」をもとに、「あくびに続く言葉はどうしよう？」と聞いてみると「わんわん」という意見が出ました。他の子から「いきなりわんわんやと、すぐに犬やとわかってしまう。今回の詩のおもしろいところは、途中からねこの詩やとわかってくるからおもしろい」という意見が出てきて、子どもたちは新たな詩の表現の工夫に気づいていきました。最終的に出来上がった詩が以下のようになります。

いぬのこ 二年二組
あくび ふあふあ
あまえて ごろごろ
ポール かみかみ
おもちゃ しゃかしやか
かくれても ぶんぶん
しかられて きゃんきゃん
よばれて てくてく
おやつで ワン

子どもたちは楽しみながら、詩の表現の工夫にたくさん気づいていき、気づいたことをもとに、自分たちなりの詩を楽しんで作っていきました。
(湖南市立菩提寺小学校)

「生成AIと教育現場」
川端 大介

新学習指導要領に生成AIの活用が盛り込まれようとしている。生成AIと小学校国語授業の今後を考えてみる。年末に文部科学省が示した生成AI活用のガイドラインを踏まえつつ、諸外国の事例も参考にその利点と課題を検討する。

文部科学省のガイドラインでは、生成AIを教育現場で活用する際の基本原則として、「教育目的に即した活用」「情報モラルの徹底」「生成物の適切性の確認」の3点が強調された。この枠組みを通じて、生成AIが国語教育の質を向上させる手段としての可能性が示された。

まず、生成AIは作文支援に大きな効果を発揮する。ガイドラインによれば、生成AIが提供する例文や題材のアイデアを通じて、児童が自由に表現する力を育むことが可能であるとされる。具体例として、作文の導入部分でアイデアが浮かばない児童がAIの提案を参考にすることで、スムーズに書き始めることができる。また、生成された文章を基に児童が自分の言葉で再構成する活動を通じて、表現力や発想力がさらに磨かれる。

次に、生成AIは読解力向上にも役立つ。ガイドラインでは、児童

の習熟度に応じた問題文や補助教材の生成が推奨されている。これにより、個別最適化された学習が可能となり、児童の理解度を深めることができる。さらに、AIが多角的な解説を提供することで、批判的思考や多様な視点を持つ力を養う教育が期待される。教師にとっても、生成AIは強力なサポートツールとなる。ガイドラインでは、教師の負担軽減を目的とした生成AIの活用が奨励されている。具体的には、教材作成や児童の回答へのフィードバックを効率化することが挙げられる。例えば、AIが児童の作文を分析し、即座に改善点を示すことで、教師は児童一人ひとりに寄り添った指導に集中する時間を確保できる。諸外国でも、生成AIは教育分野で活用され始めている。アメリカでは、AIを利用した個別学習支援プラットフォームが普及しており、児童の進捗に応じたカスタマイズ教材を提供している。また、フィンランドでは、生成AIを活用した多言語教育が進められており、国語以外の言語学習でもAIが教材生成を行い、児童の言語能力向上を支援している。

一方、中国では、生成AIを使った作文指導が盛んで、児童の創造力を高めるためのツールとしての利用が進んでいる。しかし、生成AIの利用には課題も伴う。ガイドラインが示す通り、生成物の適切性や正確性を確認することが

必須である。特に小学生向けの内容では、誤った情報や不適切な表現が含まれるリスクがあるため、教師が慎重に内容を精査する必要がある。また、生成AIを過信せず、補助的なツールとして活用することが求められる。

情報モラル教育も不可欠である。ガイドラインでは、児童が生成AIを使用する際、自分で考え判断する力を育むことが重要とされている。AIが提供する情報を鵜呑みにせず、適切に利用するためのリテラシー教育を通じて、児童が責任ある利用態度を身につけることが期待される。

さらに、生成AIが児童の学びの主体性を損なうリスクにも留意すべきだ。ガイドラインでも、生成AIの利用が児童の思考力や表現力を奪うことがないよう、教育現場での工夫が求められている。例えば、AIが提示した内容をそのまま使用するのではなく、自分の意見を補足する形で活用する方法等が推奨される。

最後に、生成AIの活用には教師がいかに生成AIを理解できるかが鍵になるだろう。ガイドラインに基づき、適切なルールの共通理解、共通実践を通して、児童の個別最適で協働的な学びを推進する一助となるだろう。今後、どのような教育効果をもたらすのか、実に興味深い。

(滋賀大学教職大学院)

編集後記

▼12月例会
(五十三回)
は「第6回

全国国語実践研究会・滋賀大会」に共催団体として参加。(会場・クサツエストピオホテル)研究テーマは「言葉による見方・考え方を高める国語科の授業実践」▼第1日目①実践提案は田中詠(群馬)研究教材は「川とノリオ」(6年教育出版)司会者は坂爪新太郎(群馬)指導助言は中戸育代(大阪)②実践提案は少徳信。研究教材「すがたをかえる大豆」(3年光村図書)司会者は蜂屋正雄(滋賀)指導助言は佐藤智恵(埼玉)実践提案において「日常の授業において集まれない子や興味を示さない子の指導について成果を発表。指導助言では、確かな学力を育てる教材研究や授業実践の基本について示唆する内容であった▼第2日目・シンポジウム「言葉による見方・考え方を高める国語科の授業実践」について。司会者は川那部隆徳(滋賀)。登壇者は栗田稔(大阪)三上昌男(滋賀)澤田佳子(愛知)論点として、「いろいろなふね」を例に読むことにおける手堅い授業実践について(栗田)学習指導要領を中心にこれからの授業について「ごんぎつね」を例にこれからの授業の指導で「三上」教師目指す学生の指導について「盆土産」(中学校教材)を例にした授業実践(澤田)多面的で深い内容に学びの多いシンポジウムであった▼講演は吉永が総括を含めて成果と学力調査の結果や自由進度学習など今後の授業改善について展望を伝えた。(文中敬称略)▼巻頭には、上出愛先生から玉稿を頂きました。深謝。

(吉永幸司)